

伊那市高遠町における商業機能の変容と花見観光の関係性

吉沢 直・薄井 晴・郭 慶玄
矢ヶ崎太洋・呉羽正昭

本研究は、桜の名所である伊那市高遠町の「ご城下通り商店街」を対象に、商業機能の変容と花見を中心とした観光との関係性を明らかにした。高遠町は、伊那市の観光政策において重要な観光資源を多く有する。しかし、その主要な観光イベントである「さくら祭り」の入場者数は2000年ごろから減少し、各年の開花状況の影響を受ける不安定な観光資源となった。ご城下通り商店街は、地方商店街の全国的な動向と同様に衰退傾向にある。また、半数以上の店舗の主要顧客圏は高遠町内であり、観光客の来店はほとんどみられない。かつては、さくら祭り期間中に各店舗による高遠城址公園への出店が積極的に行われたが、環境保護、店舗経営上の理由から出店数は大幅に減少した。さらに、商店街の各店舗での観光消費も減少傾向にある。つまり、花見観光と商店街の関係性は希薄化する傾向にあり、今後、どのようにご城下通り商店街で収益構造を作り、高遠町に利益を生み出すかが課題となっている。

キーワード：商店街活性化、観光商店街、さくら祭り、伊那市高遠町ご城下通り

I はじめに

I-1 研究の背景

日本の地方都市において、商店街は古くから重要な中心機能を担ってきた。しかし、モータリゼーションの進展や大手資本による全国的な店舗網の形成などにより、その衰退が顕著である。加えて、地方都市では少子高齢化が進み、商店街での消費の低下につながった。商店街における店舗の廃業には、経営者の高齢化や後継者の不在が背景にある。このような商店街の衰退による都市の空洞化が現代日本の課題である。

こうした苦境を打開するため、全国各地で商店街の活性化が模索され、その主要な手段の一つとして地域資源を活かした観光振興が挙げられる。例えば、東京都青梅商店街では、商店街の経済的な活性化策として実施された「青梅宿アートフェスティバル」が、新たな昭和レトロな街という地域イメージを創出し、その後のまちづくりに影

響を与えた（設楽・菊地，2008）。また、茨城県大洗町の大洗町商店街では、大洗町を舞台としたアニメを利用した観光振興を行い、新たな観光客に地域おこしの主体という「役割」をもたせることでリピート率を上げ、持続的なアニメの聖地として街を発展させた（小原，2018）。その他にも、観光を利用した商店街の活性化として、沖縄県那覇市国際通り（小川，2007）、大分県豊後高田商店街と豆田商店街（関谷，2013）などが挙げられる。

これらの事例は、地方都市における商店街の顧客を地元住民から観光客を主体とした交流人口へ移行拡大したことを意味する。また、商店街で観光振興を積極的に行うことによって、「〇〇のまち」といったイメージの確立に寄与した。

全国の地方商店街が衰退傾向にある中で、商店街と観光の関わり的重要性は増加し、その動向に関しては多分野の学問領域で研究がなされている。しかし、そうした研究は上記のような商店街が観光によって活性化した事例についての分析が

中心で、もともと地域に根ざした観光資源を有し古くより観光業との関わりを持つ事例の検討はみられない。この検討を通じ、商店街と観光との関係にみられる地域的な特徴に新たな視点をもたらすことが期待されると考えられる。

本研究は、伊那市高遠町のご城下通り商店街の商業機能の変容とさくら祭りを中心とした観光との関係性を明らかにすることを目的とする。

研究対象とするのは、桜の名所として知名度の高い長野県伊那市高遠町の「ご城下通り商店街」である。商店街の西部に位置する高遠城址公園には「天下第一の桜」と評される1200本のコヒガンザクラ群があり、高遠町では花見観光を基調とした観光まちづくりが行われてきた（高遠町、1997）。しかし、近年は商店街の衰退とともに、花見観光による観光客入り込み数も減少している。こうした状況下、観光と商店街の関わりも変容している可能性がある。

上記の研究目的を達成するに当たり、地域の観光の実態と商店街の変容の関係性に着目する。まずⅡ章で高遠町の観光の特性について、統計資料の分析や観光関連施設への聞き取り調査から検討する。Ⅲ章では、ご城下通り商店街における商業機能の変容について、土地利用図の分析と各商店への聞き取りで得られた情報から検討する。次いで、Ⅳ章で観光と商店街の関係性について検討し、それらの結果を考察する。

1-2 研究対象地域

伊那市高遠町は長野県南部の上伊那に位置する旧市町村で、東西約11km、南北約19km、面積は139.36km²でその85%は森林が占める（第1図）。交通は、中央自動車道伊那IC、諏訪ICより首都圏へ約3時間、中京圏へは約2時間の距離にある。2006年の市町村合併で伊那市と長谷村と合併し、伊那市の一部となった。伊那市高遠町の人口は2018年5月現在5,701人で世帯数は2,294である。高遠町の人口は1980年以降減少傾向にあり、同時に高齢化が進行し、2015年には65歳以上の人口が40%を超えた（第2図）。

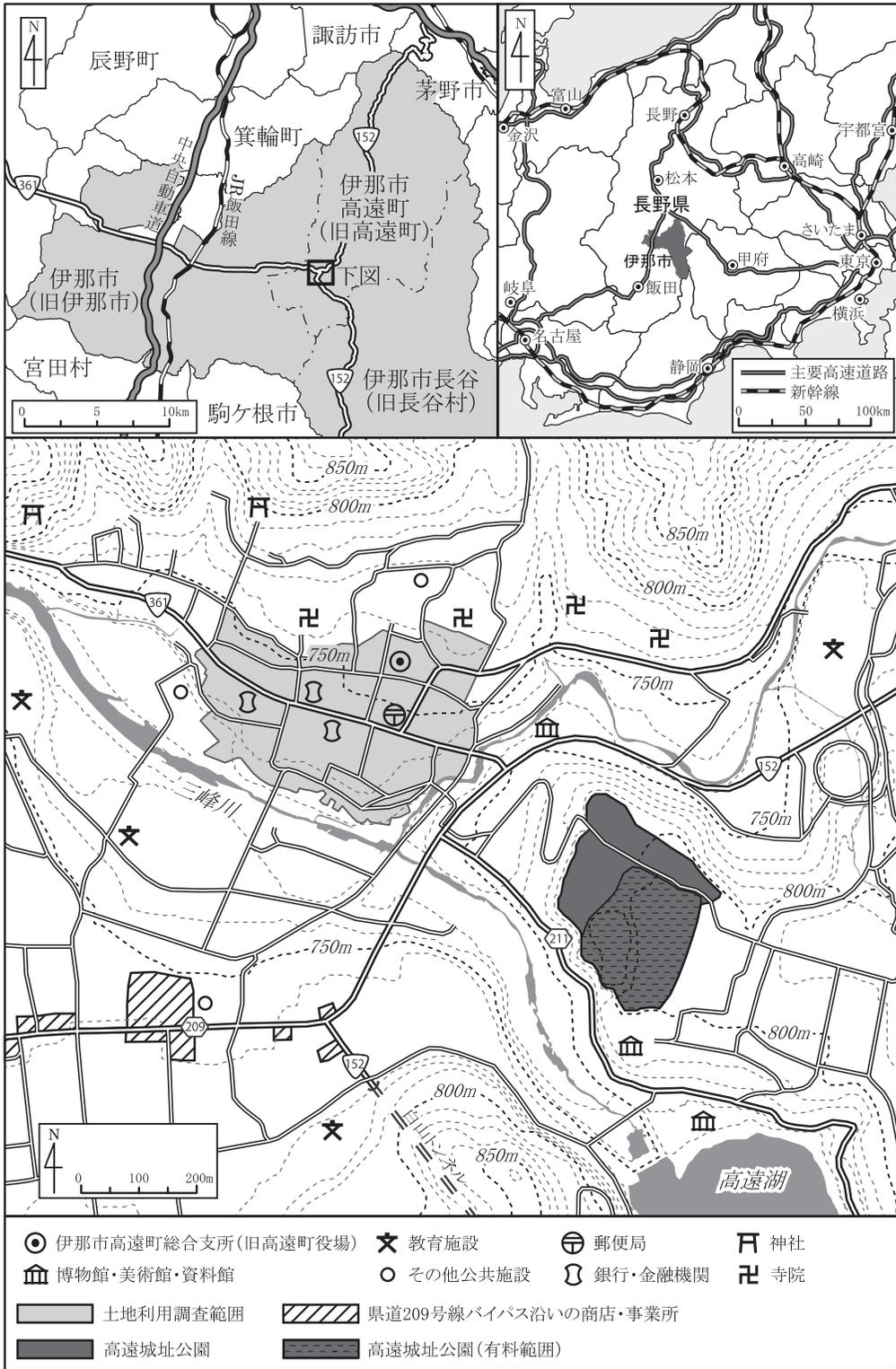
高遠町は、約700年の歴史を持つ高遠城の城下町として栄えた。城主は、諏訪氏、高遠氏、武田氏、織田氏を経て、徳川時代となってからは保科氏、鳥居氏と移り変わった。1691年に内藤氏が領主となり、1872年に高遠城が廃城されるまで約180年の長期にわたって高遠藩を統治した。その後も太平洋戦争直前までは、上伊那地方の政治、経済、文化、交通の中心地として繁栄した。特に城下町であった性格のため、文化・学問の地として有名であり、藩校であった進徳館からは明治時代を支えた多くの人材を多く生み出した。1875年には、西高遠町・東高遠町として長野県下で最も早く町制が施行され、1889年に両町が合併して高遠町となった。また、1906年までに長藤村、三義村、藤沢村、河南村を編入合併し、現在の伊那市高遠町の領域となった。

しかし、明治時代以降、高遠町の西に位置する旧伊那市が上伊那郡の中心地としての地位を徐々に向上させ、特に天竜川沿いの伊那谷における鉄道や高速道路などの交通網が敷設されると高遠町の中心性は低下した。その後、2006年3月31日に高遠町は長谷村とともに伊那市に吸収合併された。

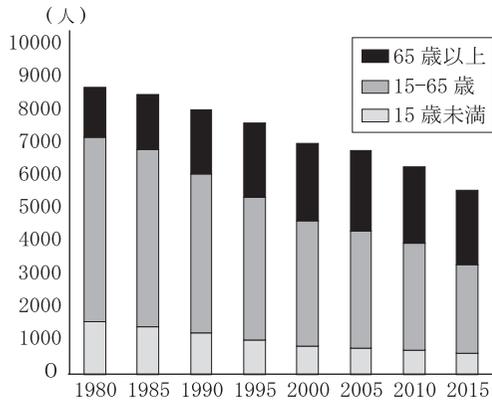
国道361号線（以下、ご城下通り）沿いの「ご城下通り商店街」は、高遠城址公園の西部に位置し城下町として栄えた（第1図）。先述のとおり、高遠城址公園には「天下第一の桜」と評されるコヒガンザクラ群があり、春になると毎年多くの観光客が訪問する。ご城下通り商店街の各店舗は、観光客による消費増加の恩恵を受けることや、さくら祭りでの出店販売を行ってきたために観光との関わりが強い。

中心性の低下がみられる当地域において、その活性化のためにさまざまな取り組みがなされた。過去約30年間の大きな変化として、「都市計画街路事業」と「バイパスの開通」の2つを挙げることができる。

都市計画街路事業は、①ご城下通りの拡幅、②各商店の外壁の城下町風への変更の2点に整理される。平成当初前後の高遠町では、生活圏の拡大



第1図 研究対象地域 (2018)



第2図 高遠町における人口構成の推移
(国勢調査より作成)

や自動車保有率の増加が顕著となった。しかし、ご城下通りの区画は城下町時代のままであり、道幅は自動車が対面通交するには狭く、危険性も高かった。自動車交通量のさらなる増加が予想されたため、道幅を上げた上で両側に歩道を設置することになった。商店街の多くの建物はその後退を迫られ、ご城下通りに面する建物のほとんどは建て替えられた。なお、この街路事業はご城下通りに面する高砂町、本町、仲町、霜町、横町で実施された。

街路事業の実施に伴い、各建物の外壁は城下町風に統制されることになった(写真1)。街路事

業の計画書である「うるおいと誇りある郷土高遠のまちなみ～街路事業基本計画～」によると、街路事業の内容は7項目にわたる。(第1表)

もう一つの大きな変化は高遠バイパスの開通である。高遠バイパスは県道209号の総称であり、2010年に全面開通となった。このバイパス開通により、ご城下通り商店街の迂回が可能となった。地域住民にとっては外部へ行く新たな経路が確保されるとともに、バイパス沿いに新たな商業集積も認められる。これによりさくら祭り開催時の観光客による渋滞も解消傾向にあるという。



写真1 ご城下通り商店街の町並み
(2018年5月 吉沢撮影)

第1表 街路事業の詳細

街並み	瓦屋根、外壁の色の統一(白、黒、焦茶)など、申し合わせにより景観の統一を図り、うるおいのあるまちづくりを行う。
歩道	まちなみの景観にマッチした素材の仕様とカラーを検討し、「歩いてみたくなるような町」になるような歩道の整備を行う。
街路灯	統一した色彩、デザインによってシンボル化を図る。
植栽	サツキ、ツゲ、ボタンなど低木の植栽による景観づくりを行う。
電柱	城下町の景観にマッチさせるため電線の地中化を行う。
高砂橋	高砂橋に着手し、城址公園と城下町の入り口としてのイメージを考えた橋とする。
ポケットパーク	残り地などを利用して、城下町として相応しいポケットパークの整備を行う。

(高遠総合支所提供資料「うるおいと誇りある郷土高遠のまちなみ～街路事業基本計画～」より作成)

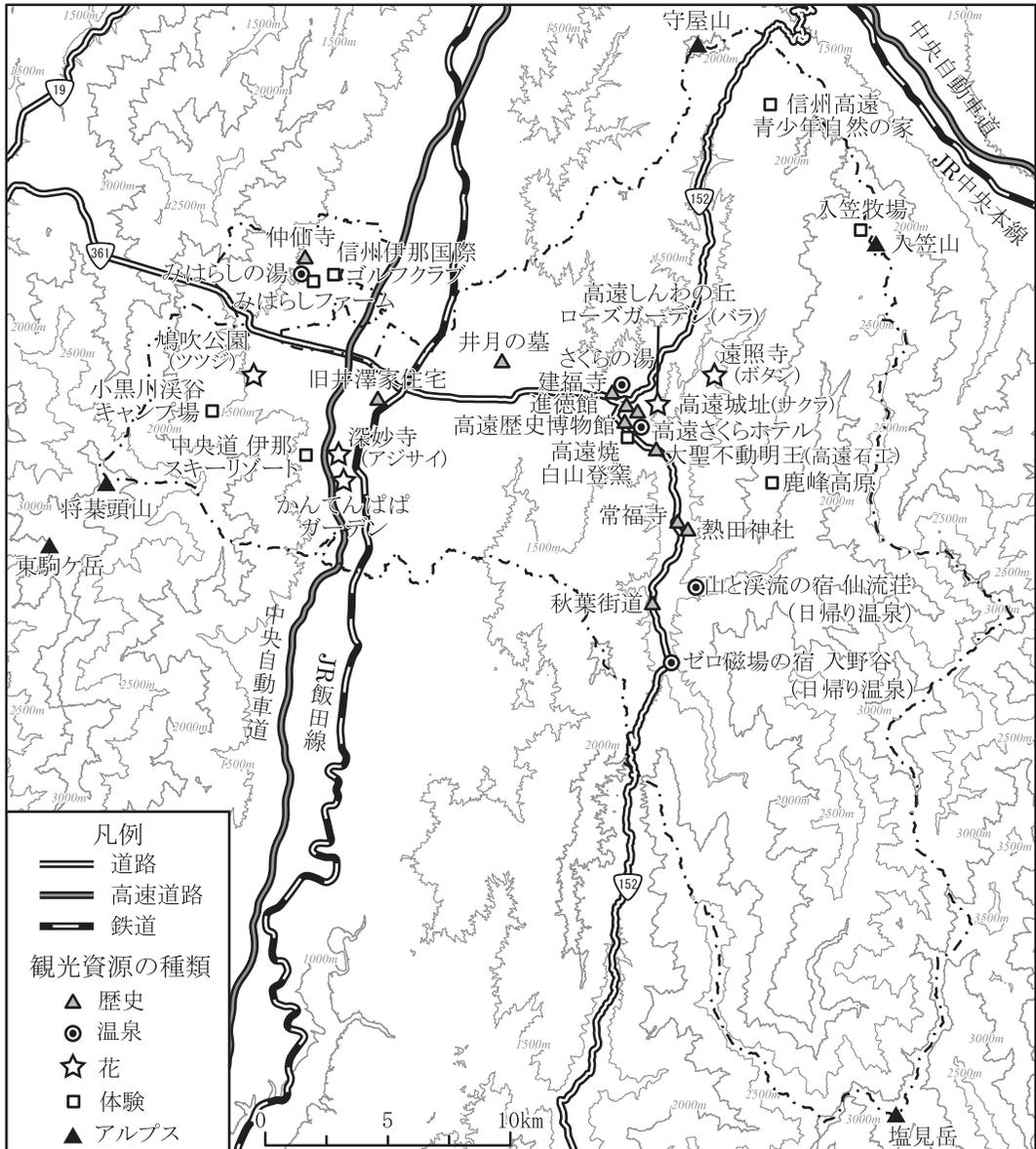
II 地域観光の変容

II-1 伊那市の観光推進と高遠町

伊那市には高遠町のさくら祭り以外にも観光資源が存在する。ここでは、伊那市の観光資源、行政の観光への取り組みを分析し、伊那市全体における高遠町の観光の位置づけを検討する。

伊那市の観光資源は歴史、体験、温泉、花、山岳、食に分類されている。そのうち食以外を地域的にみると、観光資源は主に旧伊那市エリア、羽広エリア、高遠エリア、長谷エリアの4つの地域に集中することがわかる（第3図）。

旧伊那市では、中心市街地に宿場町の歴史を残した旧井澤家住宅、アジサイが有名な深妙寺、伊



第3図 伊那市における観光資源の分布（2018）

（行政資料および現地調査より作成）

那食品工業本社の周辺に開発された「かんてんぱぱガーデン」などがある。その西部の山域では、中央道伊那スキーリゾートや小黒川渓谷キャンプ場がある。羽広エリアでは、羽広丁石を有する仲仙寺、農業体験や温泉を中心としたみはらしファームがある。高遠町では、桜の名所である高遠城址公園、江島囲み屋敷を含む高遠歴史博物館、高遠温泉、多数の神社仏閣などといった城下町の歴史を反映した観光資源がある。長谷村では、道の駅南アルプスむら長谷、熱田神宮、江戸期における物資輸送の要であった秋葉街道などがある。これらに加えて、南アルプスの東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)、塩見岳、入笠山などの山岳も登山者を惹きつけている。高遠町には歴史や花に関する観光資源の数が他エリアに比べて最も多いことが特徴である。

伊那市における観光イベントを示した第2表によると、観光イベントの多くは春季と秋季にあり、旧伊那市や高遠町で開催されることが多い。これらのイベントは神社仏閣の祭礼、スポーツ大会、花の祭り、そばの祭りに分類でき、地元の祭礼を除いたイベントである花の祭りとそばの祭りは誘客の中心であることがわかる。

伊那市の観光は主に伊那市観光課、伊那市観光協会、上伊那広域DMO、その他の民間企業や住民によって推進され、その観光資源やイベントによって関係する組織が異なる。行政は、施設の管理といった観光インフラの整備、観光資源のPR活動、関係組織の調整などを主な業務とする。伊那市は、花山食、教育旅行、インバウンドツーリズムの推進に力を入れている。花山食では、高遠城址公園のさくら祭りを含めた花の祭り、南アルプス、高遠そばやソースかつ井などの伝統食をアピールしている。教育旅行は民宿での修学旅行を指し、学校へのPRを行う。伊那市観光協会によると、高遠エリアは歴史や花に関する観光資源が多く、伊那市の観光政策において重要な地位にある。

次に、伊那市へ来訪する観光客の動きをみてみよう。2012年以降の観光地利用者数はおよそ160

第2表 伊那市における主な観光イベント

月	名前	場所
1	みはらしいちご園オープン 羽広の獅子舞(仲仙寺)	西箕輪 西箕輪
2	だるま市(鉾持神社)	高遠
3	春の高校伊那駅伝	旧伊那・高遠
4	高遠城址公園さくら祭り やきもち踊り(八幡社白山社合殿)	高遠 旧伊那
5	南アルプス北部開山祭 ぼたん祭り スーパーエンデューロ・イン・天竜	長谷 高遠 旧伊那
	みはらし五月まつり イーナちゃんウォーキングカーニバル	西箕輪 西箕輪
	初夏の呑みあるき 入笠山開き	旧伊那 -
6	高遠しんわの丘ローズガーデンバラ祭り ローメンの日 長衛祭	高遠 -
7	あじさい祭り	長谷
8	伊那まつり さんよりこより	西春近 旧伊那
9	高遠城下祭り 燈籠祭り 秋の呑みあるき	美篤・富県 高遠 高遠 旧伊那
10	ぶっとおしそば三昧 行者そば祭り イーナちゃん駅伝カーニバル 南アルプスふるさと祭り 伊澤修二記念音楽祭 山麓一の麵街道フェスタ 高遠城址もみじ祭り	旧伊那・西箕輪 高遠・西春近 旧伊那 旧伊那 長谷 旧伊那 高遠 高遠
11	秋は実りのみはらしまつり 食の感謝祭 (道の駅南アルプスむら長谷)	西箕輪 長谷

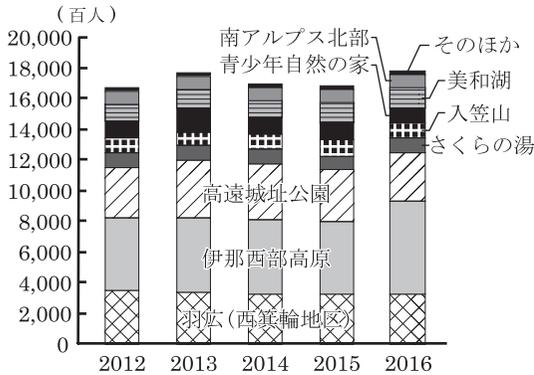
(伊那市 (2018) より作成)

万人から180万人の規模で安定している(第4図)。2016年では、伊那スキーリゾートを含めた伊那西部高原が約34%を占め最も多かった。みはらしファームを含む羽広エリアとさくら祭りが開催される高遠城址公園はそれぞれ約18%を占めた。つまり、これらの3つの地域が重要な観光目的地であるといえる。

II-2 高遠町における観光とさくら祭り

ここでは高遠町の観光資源を整理しつつ、特に重要な観光資源である高遠城址公園のさくら祭りについて検討する。

高遠町の観光資源の立地を示した第5図によると、城下町の立地を反映した神社仏閣や歴史文化

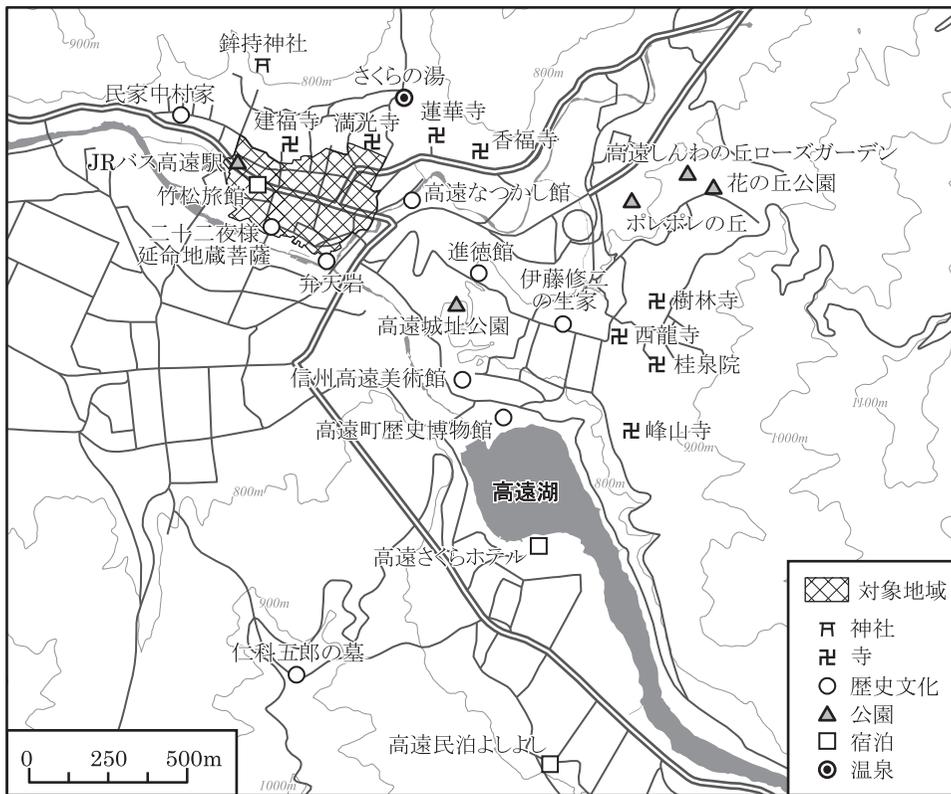


第4図 伊那市における観光地への来訪者数の推移
(伊那市(2018)より作成)

に関する観光資源が多いことがわかる。伊那市高遠総合支所では、現在、ご城下通り商店街内での観光収入の創出のために神社仏閣や歴史文化を活

用した観光ルートの設置を模索している。その新たなルートとして、民家中村家(2018年5月現在整備中)から高遠なつかし館までのルートはご城下通り商店街を通ることから有力であるという。高遠エリアでは寺社仏閣や歴史文化に関する観光資源だけでなく、サクラが有名な高遠城址公園、バラの有名な高遠しんわの丘ローズガーデン(写真2)、ボタンの有名な遠照寺が存在し、花が咲く時期に開催されるイベントでは多くの観光客が来訪する。

高遠エリアにおける主な観光イベントを示した第3表によると、花に関する祭り以外にも鉾持神社のだるま市、燈籠祭りが一定の集客を期待できる観光イベントであった。かつてご城下商店街で開催されていた絵島祭りは、市町村合併後に開催時期が近かった伊那祭りに統合され、祭りの中心



第5図 高遠地区における観光資源の立地

注) 高遠地区には図の範囲外に遠照寺がある。

(伊那市高遠町総合支所提供資料より作成)



写真2 高遠しんわの丘ローズガーデンにおける
バラ祭り直前の風景
(2018年5月 矢ヶ崎撮影)

第3表 高遠地区における主な観光イベント

月	名前	場所
2	だるま市	鉾持神社
4	さくら祭り	高遠城址公園
5	牡丹祭り	遠照寺
6	バラ祭り	高遠しんわの丘 ローズガーデン
7	絵島祭り	伊那祭りに統合
9	高遠城下祭り	高遠商店街
	ブックフェスティバル	高遠商店街
	燈籠祭り	鉾持神社
10	もみじ祭り	高遠城址公園
	高遠そば・新そば祭り	高遠城址公園

(伊那市高遠町総合支所への聞き取りより作成)

が旧伊那市エリアへ移動した。これらの観光イベントの開催時期をみると、春季は花の祭り、秋季は歴史文化に関する観光イベントとに分かれていた。伊那市高遠総合支所によると、これらの観光資源と観光イベントにおいて、だるま市、さくら祭り、バラ祭り、もみじ祭りなどが観光客を集めるイベントであり、それ以外の多くのイベントは高遠エリアの住民向けの性格が強い。特に、さくら祭りは最も規模が大きく、観光客の来訪が見込める観光資源であった。

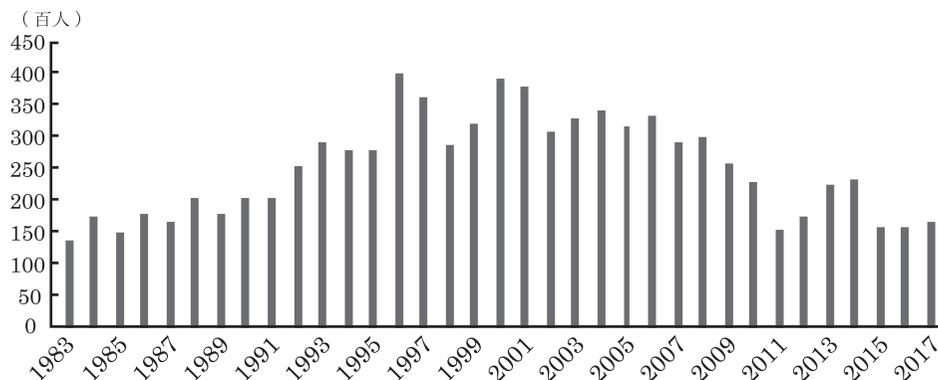
高遠エリアの中心祭事であるさくら祭りについて詳しくみてみよう。高遠城址公園のサクラは、高遠藩時代から有名であった「サクラの馬

場」と呼ばれるコヒガンザクラの並木が1872年に伐採され、1875年にそれらの苗を高遠城址公園に移植されたのが始まりである（高遠町誌編纂委員会、1983）。高遠城址公園には1200本のコヒガンザクラが植えられ、4月中旬には赤みを帯びた花が咲き乱れ、その様子は「天下第一の桜」と呼称されている（高遠町誌編纂委員会、1979）。高遠城址公園のサクラは高遠町の住民に愛されるとともに、サクラが満開の時期に開催されるさくら祭りには、その評判から多くの観光客が来訪してきた（写真3）。高遠城址公園のコヒガンザクラは1960年に長野県の天然記念物に、同時に高遠町のシンボルの花にも制定され、桜守によって保護されてきた。その一方で、高遠城址公園のサクラは高齢化しており、その保護と保全を目的として観光客から入場料を徴収する有料化が1983年に行われた。

高遠城址公園におけるさくら祭りの来場者の推移を示した第6図によると、有料化を開始した1983年以降で、最も来場者数が多かったのは1996年で40万人を記録した。その後は、堅調に推移するものの徐々に来場者数は減少した。特に、統計の対象期間が変更された2013年以降は有料化開始時と同程度まで減少した。さくら祭りの入場料による収入は主に高齢化するサクラの保護費、高遠城址公園の清掃費、ゴミ処理費に当てられる。サクラの開花は年によって異なるため、満開時期と



写真3 高遠城址公園におけるさくら祭りの風景
(伊那市高遠町総合支所提供資料)



第6図 高遠城址公園におけるさくら祭りの来場者の推移

注1) さくら祭り開催の有料期間のみの来場者数を示す。1983年の有料化時は入園料200円、2018年現在は500円である。

注2) 2012年以前の有料期間は行政および関係団体の協議によって設定され、おおそ4月上旬からゴールデンウィークまでであった。2013年以降は有料期間を4月中とした。

(伊那市高遠町総合支所提供資料より作成)

休日の重複や散る時期によってさくら祭りの来場者数が変化する。伊那市役所高遠総合支所によると、さくら祭りの来場者は主に関東圏と中京圏からの来訪が多く、その内3～4割が60～70代の観光客である。

さくら祭りは高遠商店街にとって売り上げ増加をもたらす重要な販売機会であったため、さくら祭りの開催期間中は高遠城址公園の内外で土産屋や露店が設けられた(写真4)。高遠城址公園内における販売は、1993年ごろまでは小屋や長屋形式でなされ、50店舗ほど存在した。しかし、その



写真4 さくら祭り期間中の出店の様子

(伊那市高遠町総合支所提供)

後のサクラの保護を目的とした規制によって露店形式へと変更され、新規参入は認められなくなった。その結果、店舗数は年々減少し、2018年現在では、さくら祭りの開催期間中に18店舗が営業し、その内7店舗は伊那市商工会が管理する。場所代は伊那市の条例で定められており、月額6万円である。これらの露店の運営者は高遠町の住民だけでなく、旧伊那市の業者も含まれる。

高遠城址公園のさくら祭りへの来訪手段は、以前はツアーなどの団体バスが多かったが、現在は自家用車による個人旅行が多い傾向がある。高遠城址公園の近隣に駐車場が整備されたこともあり、商店街を通らずに来訪する観光客も多い。結果的に、以前のように観光客が高遠商店街を散策することも少なくなったという傾向が、伊那市高遠総合支所への聞き取りで把握された。

以上から、高遠城址公園のサクラはさくら祭りを媒介として集客力のある観光資源であるが、入場数からみると、近年は衰退傾向がみられる。サクラ樹木の高齢化やその年によって開花状況や集客規模が異なるため、不安定な観光資源として性格づけられるといえる。

Ⅲ ご城下通り商店街の商業特性

Ⅲ-1 土地利用とその変化

本章では、商店街の商業特性とその変化を明らかにする。まず、2018年の現地調査に基づいて土地利用の特性を分析する。また、入手できた住宅詳細図をもとに1990年以降の土地利用の変容を明らかにする。

1) 2018年の土地利用

第7図は、2018年5月時点での研究対象地域の土地利用を示す。商業特性の地域的な差異を明瞭にするために、研究対象地域の内部をご城下通りに面す「中部」、面していない領域をそれぞれ「北部」「南部」に分けて分析し、土地利用の用途別に区画数を集計した（第4表）。

ご城下通り商店街の中核をなす中部は、霜町・仲町・本町・高砂町の範囲に該当し、都市計画街路事業による建物の改築や修景が最も盛んに実施された地区である。この地区内の区画のほとんどは間口が狭く奥行きの長い特徴を備えており、城下町を由来とする高遠町の歴史を反映する。区画を用途別に集計すると、店舗・事業所兼住宅が39区画と最も多く、20区画の住宅、17区画の店舗・

事業所、12区画の駐車場が続く。

北部は袋町・新町・横町に概ね相当する地区であり、都市計画街路事業に伴う修景は横町のみで確認される。138区画のうち半数に近い64区画が住宅として利用され、駐車場の21区画、空き家・空き店舗の15区画、店舗・事業所兼住宅の12区画が続く。伊那市高遠町総合支所や高遠商工会館といった公共施設もみられ、第7図の範囲外の北には高遠町文化センター、銚持神社、満光寺、建福寺が立地する。

南部は稲持町・梅町・島畑町・桜町が概ね相当し、修景はほとんどみられない。北部同様に住宅が卓越しており、店舗・事業所兼住宅が6区画、店舗・事業所が3区画に過ぎず、商業機能はきわめて小さい。また、空地・工事中が32区画、空き家・空き店舗が12区画存在しており、対象地域で人口減少や商業の衰退が最も顕著に現れた地区であり、急峻な地形と狭小な道路がその一因であると考えられる。

研究対象地域において、現在の商業機能は、都市計画街路事業が最も盛んに実施されたご城下通り沿いに集中する。店舗・事業所兼住宅および住宅の合計値を集計すると、北部が76区画、中部が59区画、南部が62区画となり、居住機能は3地区にはほぼ均等に分布することが分かる。ただし、空地・工事中および空き家・空き店舗の区画数は、立地や自動車利用時における利便性の面で比較的不利な南部に偏っていた。

2) 1990年以降の土地利用変化

第5表は、1990年の研究対象地域における土地利用の区画数を用途別に集計したものである¹⁾。第4表と第5表とを比較すると、店舗・事業所および店舗・事業所兼住宅の合計値である商店数が最も大きく変化した。すなわち、1990年の159軒から2018年の82軒へと、30年足らずのうちにほぼ半減した。1990年の正確な空き家・空き店舗数は把握できないが、市役所支所、商工会、商店街の商店への聞き取りによると、当時空き家・空き店舗はほとんど存在しない状況であったという。こ

第4表 ご城下通りとその周辺における土地利用の用途別区画数（2018年）

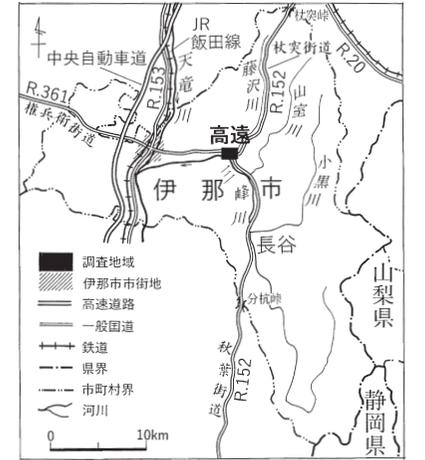
土地利用区分	北部	中部	南部	計
住宅	64	20	56	140
店舗・事業所	9	17	3	27
店舗・事業所兼住宅	12	39	6	55
公共施設・宗教施設	7	3	5	15
農地	7	0	3	10
空地・工事中	2	0	12	14
駐車場	21	12	8	41
倉庫	2	1	1	4
空き家・空き店舗	15	11	32	58
計	138	101	125	364

（現地調査より作成）



調査日：2018年5月21日～25日
 調査者：呉羽正昭，鄭 紫来，喜馬佳也乃，
 鈴木修斗，綾田泰之，山口桃香，
 李 詩慧
 修正者：吉沢 直，薄井 晴，郭 慶玄，矢ヶ崎太洋
 製図者：宮坂和人

調査地域位置図



- 商業
- 囲みは店舗兼住宅
- S**: 菓子・土産品
- L**: 酒類
- P**: 加工食品 (茶粉製麺)
- C**: 衣類・呉服・靴
- D**: 薬・化粧品
- V**: メガネ・時計・貴金属
- G**: 文具・書籍・雑貨
- F**: 燃料・住宅設備
- W**: 金物・建設用工具
- サービス業
- I**: 宿泊施設
- R**: 飲食・喫茶
- B**: 理容・美容
- H**: 医療機関
- C**: クリーニング・衣類メンテナンス
- 業務
- M**: 金融業
- O**: 事務所
- 公共施設・宗教施設
- 公**: 公民館・集会場
- 消**: 消防団
- 祀**: 寺院
- 市**: 市関係施設
- 石**: 石碑
- : その他
- 住宅
- 空家・空き店舗
- その他
- E**: 空地・工事中
- Ⓟ**: 駐車場
- S**: 倉庫
- 農地
- 急傾斜地
- 河川
- 道路
- 河川敷
- 修景された建物
- 調査範囲外

第7図 ご城下通り商店街における土地利用図 (2018)

(現地調査より作成)

第5表 ご城下通りとその周辺における土地利用の用途別区画数（1990年）

土地利用区分	北部	中部	南部	計
住宅	74	17	69	160
店舗・事業所 店舗・事業所兼住宅	49	81	29	159
公共施設・宗教施設	8	3	6	17
農地 空地・工事中 駐車場 倉庫	24	12	22	58
計	155	113	126	394

注1) 店舗・事業所兼住宅と店舗・事業所の、また農地、倉庫、空地・工事中の判別が困難であったため、第4表では区別せずに集計している。

注2) また、空き家・空き店舗の集計はしていない。

(『J・P・Aの住宅詳細図
伊那市・高遠町・長谷村・
南箕輪村 1990』より作成)

これらのことから、研究対象地域全体での商店数の減少が顕著であり、商業機能は衰退傾向にあることがわかる。

地区別にみると、中部では店舗数が81軒から56軒(69%)に減少し、北部では49軒から20軒(41%)に、南部では29軒から8軒(28%)に減少した。つまり、商店数の減少はご城下通りの裏通りにあたる北部と南部で商業の衰退が顕著であった。

次に居住機能に着目すると、北部および南部では、住宅がそれぞれ10あるいは13区画減少しており、3区画のみの減少に留まった中部に比べて住民の減少が顕著であることが示唆される。なお、その他の農地、空地・工事中、駐車場、倉庫の合計区画数および公共施設・宗教施設の区画数も変動したが、これらの変動幅は小さい。

Ⅲ-2 商業機能の変容

本節では、ご城下通り沿いの中部に位置する調査協力が得られた店舗への聞き取り調査(2018年5月)に基づいて、より詳細に商業特性の変容を分析する。

1) 商店街の商業特性

第6表には、各商店の店舗属性、経営者、主要顧客を示した。店舗属性にあたる業種、取扱商品・サービスをみると、菓子・土産物、加工食品販売(茶・粉・製麺)、衣類・呉服・靴、メガネ・時計・貴金属などの専門店が多いことがわかる。一方で、食品スーパー、八百屋、肉屋、魚屋など生鮮食品を扱う店舗が存在しない。2004年時点では霜町に食品スーパーの「北條ストア」があり²⁾、また2018年4月ごろまで高砂町に食品スーパーの「ヤマザキシヨップ」が立地したが、いずれも閉業した。人口減少の進んだ高遠町内の消費の少なさに加えて、ご城下通り商店街から車で約5-10分程度のバイパス沿いに、地元大手資本の大規模スーパーの立地が影響したと考えられる。また、高遠町では「高遠そば」が名物であり、商店街にも蕎麦屋が3軒立地する。

歴史の古いご城下通り商店街では、明治時代から昭和時代にかけて開業し、建物や土地の所有権が家族によって代々引き継がれている商店が大部分を占める。これらの商店は店舗兼住宅の傾向がある。

経営者の年齢は30代が1名、40代が4名、50代が5名、60代が7名、70代が4名、80代が3名、90代が1名とであり、経営者の高齢化が進む。また、息子世代が長野県内の他地域や大都市圏に転出するケースが多く、後継者のめどが立たない商店、あるいは当代限りで経営を打ち切ることを決定した商店が多数を占める。したがって、ご城下通り商店街では、今後も商店数の減少が続くことが予想される。

2) 商店の類型

Iで述べたとおり、顧客層を地元住民から観光客へと移行拡大することで、商店街の活性化を目指す事例が全国各地で見られる。そこで本節では、ご城下通り商店街における商業機能の特徴を把握するために、経営者と顧客が地元住民であるか観光客であるかによって、ご城下通り商店街の各商店の類型化を試みた(第6表)。

第6表 ご城下通り商店街における各商店の経営形態

店舗 番号	店舗属性						経営者			主要顧客	
	業種	取扱商品・サービス	町名	開業年	住宅の併設	所有形態	年齢	移住者	後継者	居住地	年齢層
A1	V	メガネ・時計・ 宝飾・補聴器	霜町	1967	○	所有	50代	×	×	高遠	70代
A2	R	和食	霜町	1979	○	所有	60代	×	×	高遠	50～60代
A3	S	菓子（製造あり）	霜町	1875	○	所有	30代	×	○	高遠,県内	60～70代
A4	G	日用雑貨、荒物	霜町	1949	○	所有	70代	×	×	高遠	70～80代
A5	W	建設用工具	霜町	1946	○	賃貸	60代	×	○	県内	（業者向け）
A6	D	化粧品	仲町	1973	○	所有	50代	×	×	—	60～70代
A7	G	日用雑貨、履物	仲町	1948	○	所有	—	×	×	高遠	60～70代
A8	R	喫茶	仲町	1990	○	所有	60代	×	○	高遠	50代～
A9	W	建設用工具	仲町	1955	○	所有	40代	×	△	高遠	（業者向け）
A10	G	文具	本町	1953	○	所有	70代	×	×	高遠	50代
A11	L	酒類・新聞	本町	1978年頃	○	所有	50代	×	△	高遠,県内	50～60代
A12	V	メガネ・補聴器・ 時計・貴金属	本町	1932	○	所有	40代	×	×	高遠	70代～
A13	C	洋服	本町	昭和初期	○	所有	80代	×	△	高遠	60代～
A14	C	靴	本町	1953	○	所有	60代	×	×	高遠,県内	50～60代
A15	C	洋服のリフォーム	本町	大正末期	○	所有	90代	×	×	高遠	50～60代
A16	C	衣料品	本町	1918年以前	○	所有	—	×	○	高遠	50代～
A17	P	茶	本町	江戸末期	○	所有	60代	×	×	高遠	60代～
A18	D	薬	本町	1920年頃	○	所有	—	×	○	高遠	70代
A19	F	プロパンガス・灯油・ 住宅設備機器	高砂町	1961	○	所有	50代	×	△	高遠	—
A20	P	製粉	高砂町	1918年頃	○	所有	80代	×	×	高遠,県内	50～60代
A21	P	麺類・たばこ	高砂町	明治時代	○	所有	80代	×	×	高遠	—
B1	L	酒・食品	霜町	1879	○	所有	70代	×	×	—	30～40代
B2	I	宿泊業	霜町	1887	○	所有	—	×	○	県外	50～70代
B3	O	地場商品のネット通販	仲町	2008	○	所有	—	×	×	—	（ネット通販）
B4	D	菓のネット通販	仲町	1873	○	所有	—	×	×	県外	（ネット通販）
B5	S	菓子（製造なし）	仲町	1920年以前	○	所有	50代	×	×	県外	60代
B6	R	そば	高砂町	明治時代	○	所有	—	×	○	県外	70代
B7	R	そば・和食	高砂町	1908	○	所有	40代	×	—	—	50代
C1	R	猫カフェ	霜町	2012	×	賃貸	40代	○	×	県内,県外	60代～
C2	R	そば	霜町	2006	×	賃貸	50代	○	×	県内,県外	50～60代
C3	O	事務所・陶器	仲町	2005	×	賃貸	60代	○	×	県内,県外	50～60代
C4	R	喫茶	仲町	2006	○	所有	70代	○	×	高遠,県内	60代
C5	G	古本	仲町	2014	○	賃貸	60代	○	×	県外	70代

注1)「業種」の記号は第7図の凡例を参照。

注2)「—」は不明であることを示す。

注3)「後継者」の「△」は子息が幼い、店舗経営状況が見通せないなど、意思決定しかねていることを示す。

(現地調査より作成)

具体的には、2000年代以前から研究対象地域に居住する住民によって経営される商店のうち、長野県内の客を主な顧客とする商店をグループA、長野県外の客を主な顧客とする商店をグループBとして分類した。なお、ご城下通り商店街には、高遠町の事業所を主な顧客とする商店やインターネット通販に特化した商店も存在するが、顧客や売上げが高遠町の外部から流入するかどうかを考慮し、前者をグループAに、後者をグループBに含めた。また、研究対象地域の外部から2000年代以降に流入した移住者によって経営されている商店をグループCとした。グループCに含まれる店舗は、長野県内と県外の両方から集客する事例が多いため、顧客の居住地のさらなる分類はしない。

(1) グループA

長野県内と高遠町住民を主な顧客層とするグループAには、全店舗の半数以上を占める19軒の店舗が含まれる。古い開業時期、住宅兼店舗の形態、自身の土地所有など当地域の典型的な性質を持つ店舗である。

グループAに属する店舗は、経営者の高齢化が顕著であり後継者の目処が立たない店舗が多い。例えば、A21は製麺業を行っていたが、経営者の高齢化、労働力の減少により製麺をやめ、麺を入荷してそれを販売する形態となっている。このように高齢化や収入の減少に伴う事業の縮小が、多くの店舗で確認された。

現在は高遠町の住民の高齢化に対応した経営戦略を取る商店が増加しており、時計の修理に対応するA12、体型の変化などの相談を受けながら商品を販売するA13、健康指向の高い商品を揃え、靴の修理に力を入れるA14など、各店舗できめ細やかなサービスが提供される。

さらに、高遠町の少子高齢化の影響は取り扱い品目の変化にも確認される。例えば、A10は少子化が進行する以前は子ども向け玩具も取り扱ったが、現在は扱っていない。また、A12やA15は県立高遠高等学校の入学者を対象に、腕時計や制服

を販売することで売上げを確保したが、現在はこれら需要はなくなったという。

グループAに含まれる店舗の多くが衰退傾向にある一方で、建設用工具などを取り扱うA5は後継者を確保しており、同じく建設用工具を扱うA9は経営者の年齢が40代と若い。この2軒は建設業者が主な顧客であるため、高遠町の少子高齢化や住民数の減少が売上げの減少に結びつかず、比較的安定した経営の継続が予想される。

(2) グループB

グループBには、土産物販売業、飲食業、宿泊業を営む商店が含まれ、観光客を主な顧客とする。

B1の酒屋では、店舗を訪れた観光客に対し、経営者自身が積極的に会話をし、場合によって地域の観光案内を行う。そのコミュニケーションが地酒の販売等に繋がることも多いという。また、B6、B7には、名物である高遠そばをターゲットに多くの観光客が立ち寄る。

グループBの商店は高遠町外からの顧客をある程度獲得するが、経営状態は過去に比べ悪くなったという共通の意見を有する。例えば、菓子店B5は、饅頭の製造を行ったが、観光客の減少、土産物の需要の低下、従業者数の減少に伴いその製造をやめており、グループAの例と同様に経営の縮小が確認された。

一方で、宿泊業を営むB2は、旧高遠町と伊那市との合併後に友好都市である東京都新宿区の団体が伊那市中心部に宿泊するようになり顧客を失い、市町村合併が宿泊業経営に影響を及ぼしたといえる。

B3とB4は、需要の減少を理由にインターネット通販に特化した事例である。B3の前身にあたる米屋は江戸時代に、B4は1873年に創業しており、両店舗の歴史は長い。両店舗が店舗・事業所兼住宅であることから、研究対象地域において典型的にみられる性質を持つ店舗であったといえる。現在、B3はインターネットで地産の農産加工品を主に都市圏に住む人々に対して販売し、B4は医薬品を販売する。

(3) グループC

ご城下通り商店街が商店数の大幅な減少に直面する中、2000年代後半以降、外部からの移住者による新規出店がみられた。今まで商店街になかったアイデアで商品やサービスを提供し、県内・外から独自の客層を惹きつける。猫と触れ合いながら飲食を楽しむことができるカフェであるC1や、ハイセンスな陶器を販売するC3、数十種類のコーヒーを提供する喫茶店C4が存在する。また、ネット評価も高く洋風そばなど新たなメニュー開発にも挑戦する蕎麦屋であるC2、9月に行われるブックフェスティバルなどのなど古本を利用したまちづくりのキーパーソンであるC5もある。また、グループCに属する商店はすべて後継者が存在せず所有形態が賃貸である。それゆえ、従来の商店街の店舗の特徴であった世襲的な店舗経営の持続性は小さい。

Ⅲ-3 商店街の変化要因

1990年から2018年までの商店数の減少、各商店の経営状況と後継者の不在等に基づいて、ご城下通り商店街の商業機能は大きく縮小していると言える。以下では、こうした変化の要因について検討を試みる。

まず第1に、高遠町内の購買力の低下が挙げられる。地域内の人口減少と高齢化の進展が著しく(前掲第2図)、それに伴う消費力の減少が指摘できる。第6表からも主要な顧客の高齢化が進んでいることが読み取れる。地域内人口の減少を受け、商店街での絶対的な購買量自体が減少傾向にあり、各店舗の経営状況の悪化につながっている。

第2に、ロードサイド型の大型店立地が挙げられる。これも地方の商店街衰退という全国的傾向と同様である。まず、ご城下通り商店街から南部へ車で5分程度のバイパス沿いに、集客能力の高い地元資本の大型スーパーやドラッグストアなどが設置された影響が指摘できる。それらの店舗は大型の駐車場を備え、品揃えも零細の商店街店舗に比べ豊富である。商店への聞き取り調査によると、昭和期ごろまでのご城下通りでは、周辺の旧

長谷村、旧長藤村の住民の多くがご城下通り商店街に日用品の買い物に來訪した。しかし、現在では訪問はほとんどなくなっているという。そうした周辺地域の住民の消費がアクセスに優れる大型店でなされていると思われる。

また、ご城下通り商店街から西へ自動車で30分弱程度のところにある旧伊那市中心部の郊外にも、複数のロードサイド型大型店が立地する。伊那市商工会への聞き取りによれば、多くの高遠町の住民が旧伊那市に職場を持ち、仕事帰りに品揃えの良い大型店で生活用品を購入するようになったという。商店街では、店舗の営業終了の時刻が早く利便性が低いことも影響した。

第3に指摘できるのは、店舗兼住宅の卓越による新規参入の難しさである。既述のようにご城下通り商店街では多くの商店が店舗兼住居である。それゆえ、商店経営をやめた後も住宅として継続して居住することが可能で、実際に住み続けている例が多い。空き店舗の解消策として移住者による商店経営の促進が期待されるが、店舗兼住宅の形態では単一の台所やトイレしかないことや、店舗が居間と併設されていることによる心理的抵抗感が存在するという(商店への聞き取りによる)。つまり、ご城下通り商店街では、今後、店舗として利用できる1階の空間はあるものの、それが利用されないままで住宅化することが増加することが予想される。今後、移住者による商店経営を促進するためには、ご城下通り商店街の大部分を占める住宅併設の店舗を改造し、住宅空間と店舗空間を切り離すことが効果的であるのかもしれない。

IV ご城下通り商店街と観光との関係

IV-1 商店の観光イベント参加

1) 観光イベント参加の形態

第7表は、聞き取り調査対象店舗による観光イベントへの参加事例を示す。観光イベントへの参加形態は、(X) 出店および支店での商品販売、(Y) 出店への商品・労働力の供給、(Z) 実業団や町

内会などの組織単位での参加の3つの形態に区分できる。これら3形態のうち、営利が主な目的となるのは(X)および(Y)である。

まず、(X) イベント内での出店については、この形態はさくら祭りの開催時に多くみられ、高遠城址公園内と公園周辺の駐車場が出店場所である。2018年5月の聞き取り調査で確認された事例の全てが、食品を取り扱ったものであった。土産・菓子、特に高遠まんじゅうが主力商品で、それらの販売が大多数を占める。また、ソースカツ丼やソフトクリームなど、高遠城址公園内で消費される食品を提供する事例も存在する。さくら祭りへの出店は、霜町・仲町・本町・高砂町に立地する商店のいずれにも確認された。一方、かつては行っていたが出店をやめた店舗が半数以上を占めており、商店のさくら祭りへの出店は徐々に減少した。

次に、(Y) 出店への商品・労働力の供給については、この形態は(X)と同様にさくら祭り開催時のみにみられたものであり、事例数も少ない。調査では、高遠まんじゅうを箱に詰める内職、出店への燃料販売、出店への麺類の卸売の3事例が明らかになったが、現在では出店および土産物販売量の減少を理由にいずれも行われていない。

最後に、(Z) 実業団・町内会などの組織単位での参加については主にご城下まつり、灯籠まつり、だるま市などの開催時にみられる。特に、実業団および町内会単位での取り組みが仲町と本町で確認される一方で、霜町と高砂町ではみられず、観光イベントへの参加姿勢が町ごとに異なっていた。仲町実業団の取り組みとしては、だるま市の際に行われるだるま作りと販売、ご城下祭りの開催時にアルプス中央信用金庫高遠支店の駐車場を借りて出店されるかき氷やヨーヨーなどの模擬店が挙げられる。本町実業団でも、祭りの開催時に出店を出しており、各商店1人ずつが協力する。

実業団・町内会単位での取り組みだけではなく、商工会女性部による桜茶の提供がさくら祭り開催時に高遠城址公園内で実施される。ご城下まつりでは踊り手として参加するなど、ご城下通り商店街の観光イベントに果たす女性の役割は大き

い。他にも、有志の婦人によって結成されたお家母会によるハロウィンイベントの開催や、古本屋を中心としたブックフェスティバルの開催など、各商店は多様な組織を介して観光イベントに参加する。

2) 観光イベント参加の阻害要因

聞き取り調査の結果、さくら祭りへの参加を断念あるいは撤退する理由は次のように整理できる。

第1に、高遠城址公園内に出店する際の場所賃や支店を展開する際にかかる費用を上回る売り上げが見込めないことである。Ⅱで示したが、さくら祭りの入場者数は減少し、商店がさくら祭りへ出店しても、かつてほどの収益は得られないと認識されている。また商店への聞き取り調査によれば、この収益の減少には日本人の旅行形態の変化も影響しているという。昭和期には、さくら祭りを訪れた観光客が高遠まんじゅうや菓子等を職場の友人や親族向けに何箱も購入する「土産文化」が明瞭に存在したという。しかし、現在は祭り会場やその近隣地区内での食べ歩きが主流になり、購入量が減少した。また高遠支所への聞き取りによると、かつてはさくら祭りの期間中に観光客の訪問が分散していた。しかし、現在はインターネット普及の結果、桜の正確な開花状況が把握できるようになり、最盛期の短い期間に観光客が集中するという。このような訪問形態の変化も、さくら祭りでの収益の減少に影響すると考えられる。

第2に、人手不足である。ご城下通り商店街の大多数を占める家族経営の商店の場合、減少した収益に対応し必要最低限の従業員数で経営が行われる。また、商店街の中には、次世代となる子供を商店街外部の企業に務めさせ、自分の代で商店を閉める決定をする経営者も存在する。そうした商店では従業員が不足し、さくら祭りへの出店を行うとご城下通りの店舗を休業せざるを得ない状況になるため、出店ができない状況である。

第7表 ご城下通り商店街における各商店と観光イベントとの関わり

店舗 番号	町名	参加 形態	参加の 継続	参加イベント			参加形態・提供商品 およびサービス	参加形態の変化・ 撤退理由
				さ	灯	だ 城		
A2	霜町	(X)	○	○			五平餅・ソースカツ丼・ 弁当・ビールの提供	2016年までは 土産の販売も実施
A3	霜町	(X)	○	○			菓子の販売	
A4	霜町	(X)	×	○			土産・菓子の販売	収益が見込めなくなり撤退
A7	仲町	(X)	×	○			土産の販売	観光客の土産購入 の習慣が変化
A11	本町	(X)	○	○			D1を含めた3店舗 での共同出店	
A14	本町	(X)	×	○			共同出店	観光客の減少, 商店経営 への支障を理由に撤退
B1	霜町	(X)	○	○			C9を含めた3店舗 での共同出店	
B6	高砂町	(X)	×	○			ソフトクリーム・ 土産の販売	競争をきらい撤退, そばの販売も試みたが断念
A19	高砂町	(X)(Y)	×	○			土産販売店の展開, 出店への燃料販売	観光客の減少, (X)は2015年に (Y)は2011年に撤退
A15	本町	(Y)	×	○			高遠まんじゅうを 箱に詰める内職	内職自体が 5,6年ほど前に消滅か
A21	高砂町	(Y)	×	○			出店への麺類の卸売	1990年頃まで実施
A12	本町	(Z)	○		○ ○ ○		本町実業団・ 町内会への協力	
A13	本町	(Z)	○		○ ○ ○		本町実業団への協力	
A17	本町	(Z)	○	○			商工会女性部による 桜茶の提供	
A18	本町	(Z)	○		○ ○ ○		本町実業団への協力	
B2	霜町	(Z)	○	○			商工会女性部による 桜茶の提供	
C3	仲町	(Z)	○			○	仲町実業団への協力	
C5	仲町	(Z)	○		○ ○		仲町実業団・ 町内会への協力	

注1) 「類型」の(X)は「イベント内での出店」, (Y)は「出店への商品・労働力の供給」, (Z)は「実業団・町内会など組織単位での参加」を示す。

注2) 「参加イベント」の「さ」は「さくら祭り」, 「灯」は「灯籠まつり」, 「だ」は「だるままつり」, 「城」は「城下まつり」を示す。

(現地調査より作成)

Ⅳ-2 伊那市における高遠町の観光の位置づけ
2008年から2018年における伊那市のまちづくり
の方針を示した伊那市総合計画³⁾では、「多くの

人が訪れるにぎわいのまちづくり」が掲げられ、
具体的に3年ごとの観光地利用者の延べ数、観光
消費額による数値目標が定められ、観光振興が目

指されている。また、2017-2019年の観光関連の計画である伊那市観光実施計画⁴⁾によると、観光振興において、「山・花・食」の3つが重点柱として設定されている。そのうち、高遠町には「高遠城址公園のさくら祭り・もみじまつり」、「ローズガーデンのバラまつり」が該当し、「花」の観光資源の要所である。また、高遠そばや高遠まんじゅうといった「食」の要素も持つ。その他にも比較的歴史が浅い旧伊那市に比べ、高遠町は歴史的価値をもつ観光資源も持ち合わせている。実際に伊那市観光協会ホームページの「伊那市の魅力」⁵⁾の冒頭で紹介されるのは、高遠町であった。伊那市観光協会への聞き取り調査によると、高遠町の観光は伊那市全体の観光において主要な存在であり、今後は高遠町への新たなバス路線の作成などの交通インフラの整備が検討されているという。

しかし、その目的地となる高遠町の現況をみると、さくら祭りと紅葉まつりが行われる高遠城址公園、ローズガーデンといった「花」に関する観光資源が立地する場所と、商業集積地であるご城下通り商店街との間には物理的な距離が存在する。また、高遠城址公園、ローズガーデンのそれぞれに駐車場が整備され、現地への主要なアクセスは自家用車である。バイパスの整備も重なることで高遠町での停留は年々低下しており、観光客の商店街への流入は難しい状況にある（伊那市商工会への聞き取りによる）。

さらに、ご城下通り商店街の店舗構成をみると、取扱商品やサービスが観光とは関わりの小さい商店が多い。宿泊施設は1軒のみであり、観光収入が期待できる商店街とは言い難い。聞き取り調査でも観光客に依存した商店は少ない状況にある。

このように市町村合併後の伊那市にとって、市内地域で主要な観光資源を有する高遠町は重要視されているが、実際の高遠町の商業機能は衰退しつつあり、観光による利益の享受が難しい状況にあることが浮き彫りになった。

V おわりに

本研究の目的は、伊那市高遠町のご城下通り商店街の商業機能の変容とさくら祭りを中心とした観光との関係性を明らかにすることである。その結果、以下のことが明らかになった。

第1に、伊那市全体の観光推進において、主に花と歴史に関する観光資源を有する高遠町は、市の観光振興政策において重要な存在として位置づけられている。しかし、高遠町を代表する観光資源として長年機能してきたさくら祭りは、入場者数が減少傾向にある。つまり、サクラの高齢化が進む中で、開花状況によって集客が異なる点が顕在化し、さくら祭りは不安定な観光資源であった。

第2に、研究対象地域であるご城下通り商店街では空き店舗が増加しており、その傾向は商店街の裏通りにあたる北部と南部で顕著であった。一方、ご城下商店街沿いの中部では、裏通りに比べ商業機能が持続するものの、今後の経営継続の意向がない商店が多く存在し、特に地域住民を相手に商業を営む伝統的な店舗形態でその意向が乏しかった。こうした商店街の縮小要因としては、全国的な動向と同様に人口減少・高齢化による購買力の低下、ロードサイド型の大型店の登場などが指摘できる。

第3に、商店街の各店舗とさくら祭りの関係性が変容しつつあることが明らかになった。以前は商店街の店舗がさくら祭りへ積極的に出店していたが、環境保護等の観点から出店数が大幅に減少した。また、その後は来訪者数の減少に伴う収益の減少、店舗の労働力の減少などの理由によりさくら祭りへの出店を取りやめる店舗が増加し、ご城下通り商店街の店舗とさくら祭りの関係性は希薄化が指摘した。

伊那市全体で主要な観光資源を有する高遠町は、伊那市の観光振興の方針をもとに伊那市観光の重要な地域である。しかし、その観光消費の場となるはずのご城下商店街の商業機能は衰退傾向にある。また、商店がそもそも観光収入と直接的に結びつきの強い業種ではない点、観光資源との

物理的な距離が存在することから、観光振興によって商店街の店舗における消費拡大はあまり期待できない。

現在、衰退する商店街への対応策として、観光振興が全国各地で盛んに取り組まれている。ここでは街並み整備がなされ、街道などを徒歩で楽しむ景観が好まれているように思われる。高遠町も

こうした方向も一つの選択肢であろう。商店街の魅力向上を通じて、商店街に人びと、特に観光客を来訪させるような仕組みづくりが必要である。その際、他地域にはない高遠町の独自性を活用するならば、城下町の特性であろう。こうしたまちづくりが今後の持続性につながると考えられる。

本研究の調査に際して、伊那市観光協会、伊那市商工会、伊那市高遠総合支所商工観光課、そしてご城下通り商店街の多くの方々に多大なるご協力を頂きました。記して、お礼申し上げます。

[注]

- 1) 土地利用の復元には『J・P・Aの住宅詳細図 伊那市・高遠町・長谷村・南箕輪村 1990』を利用した。
- 2) 『J・P・Aの住宅詳細図 高遠町・長谷村2004』による。
- 3) 『第一次伊那市総合計画』<https://www.inacity.jp/shisei/sogokeikaku/dailjisogokeikaku.files/dailjisogokeikaku01.pdf>による。(最終閲覧日2018年12月18日)
- 4) 『伊那市観光実施計画』https://www.inacity.jp/shisei/kakushuplanshiryo/nogyo_noringyo/174kake20170216.htmlによる。(最終閲覧日2018年12月18日)
- 5) 『伊那市観光協会ホームページ「伊那市の魅力」』<https://inashi-kankoukyoukai.jp/contents/archives/26710>による。(最終閲覧日2018年12月18日)

[文献]

- 伊那市 (2018) : 『伊那市統計書 - 平成29年版 -』 伊那市。
- 高遠町誌編纂委員会 (1983) : 『高遠町誌 - 上巻二 -』 高遠町。
- 高遠町誌編纂委員会 (1979) : 『高遠町誌 - 下巻 -』 高遠町。
- 小原規宏 (2018) : 茨城県北部における地域おこしのメカニズムと観光化の可能性。菊地俊夫編 : 『ツーリズムの地理学』 二宮書店, 108-117。
- 設楽律司・菊地俊夫 (2008) : 昭和ノスタルジーを観光の商品に - 青梅宿の挑戦 -。菊地俊夫編 : 『観光を学ぶ - 楽しむことから始まる観光学』 二宮書店, 194-202。
- 小川 護 (2007) : 地元生活密着型商店街から観光客中心の商店街へ - 那覇市国際通り商店街。地理, **52** (11), 64-67。
- 関谷 忠 (2013) : 地域経営の時代 - 観光型商店街の研究から。マネジメントジャーナル, **05**, 28-42。
- 高遠町 (1999) : よみがえる故郷 桜からのまちづくり。財団法人 国土開発協会『人と国土11月号』, 66-71。